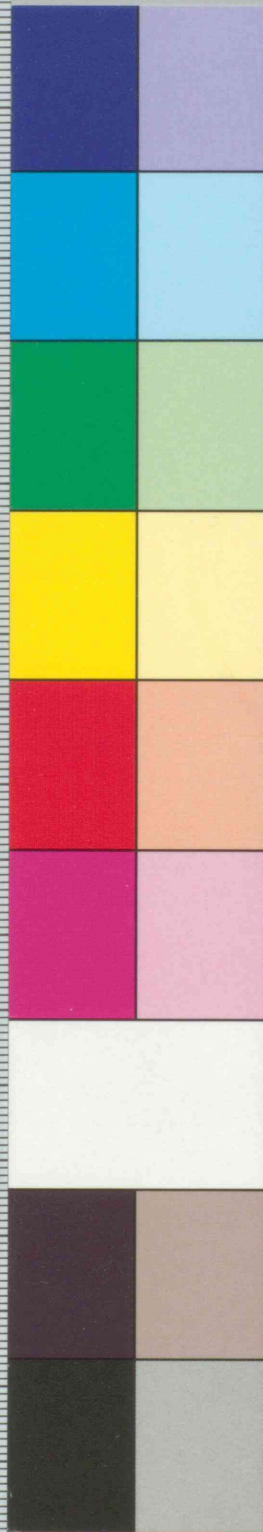


新修女子文法

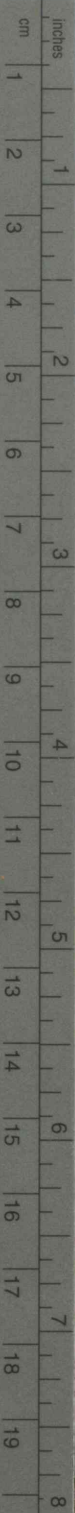
文學士
春日政治著

東京
修文館發行

教科書文庫
4
815
42-1926
2000043509



Kodak Color Control Patches



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

42219

教科書文庫

4
815
42-1926
20000 43509

資料室

教科書文庫
4
815
42-1926
2000043509

375.9
K219

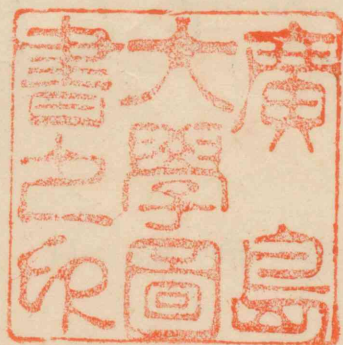
新修子女文法

文學士
春日政治 著

東京
修文館發兌

広島大学図書
2000043509





はしがき

本書は高等女學校及び之と同程度の女子中等學校の國文法教科書に充てる爲、文部省訓令の教授要目に準據して編纂したものである。著者が曩に世に問うた「新體女子文法」は初刊以來已に十年、訂正を加へること再度に及んだのであるが、茲に、實地教授者から與へられた諸方面の注意を參考し、時代の要求に適應せしむべく、すべてに亘る體裁を一新したのが本書である。抑、中等教育に於ける文法教授は、單に成文の法則を携へて無意義に機械的暗記を強ひることではない。語法に關する範疇の眞意義に觸れさせることは固より、少くも、既有の國語材料から自ら法則を歸納させる過程に、該科の價値を認

めなくてはならない。
 本書は殊にこの點に力を注いだつもりであるが、果して其の企望に副ひ得るか否かは、たゞ實地教授者の使用に俟つて之を見なくてはならない。伏して大方の批正を乞ふ次第である。

大正十四年十一月

著者 しるす

新修女子文法

目次

上篇 語の品別

第一章 品詞の職分

第一節 名詞	四
第二節 代名詞	七
第三節 動詞	二
第四節 形容詞	三
第五節 副詞	七
第六節 接續詞	三〇

第七節	感 動 詞	三
第八節	助 詞	四
第九節	助 動 詞	六
第十節	九 品 詞	六
第二章	品 詞 の 形 態	三
第十一節	活用する品詞	四
第一	動詞の活用	四
第二	動詞の活用形	五
第三	口語動詞の活用及び活用形	五
第四	形容詞の活用及び活用形	七
第五	動詞の自他	六

第六	敘述の自他	七
第七	助動詞の活用及び活用形	七
第八	活用語語尾の假名遣	八
第十二節	活用しない品詞	九
第三章	品 詞 の 接 續	一〇
下 篇 文 の 構 成		一一
第四章	文	一一
第五章	文 の 成 分	一三
第六章	成分の倒置及び省略	一三
第七章	文の組織上の種類	一三
第八章	文の敘述上の種類	一三

目次終



新修女子文法

文學士春日政治著

上篇 語の品別

一 語及び單語

- (一) ことばに おのづから はふそく あり。
- (二) わたくし は ことし から ぶんばふ を
- ならひ ます。(口)

右の文の(一)のことばに、おのづからはふそく及びありは

(口)は口語
文の符號
文語文には
符號を附け
ない。

上篇 語の品別

一

各或意味・職分をもつてゐて語である。(二)のわたくしは、ことしからふんばふをならひ及びますも亦同じである。而もこれらの語は或意味・職分を持ち得る最小單位であるから、ことに單語といふ。

練習 左の文を單語に分て。

- 一 春は一年のうちの最も好き時節なり。
- 二 すべてが冬の眠から目ざめました。(日)
- 三 ゆらりくと夕ぐれの川を流れる櫻草。(日)
- 四 搖籃を揺かす母の手は、亦よく天下を動かす。
- 五 けふできる事をあすまで延すな。(日)

第一章 品詞の職分

二 品詞

單語は其の職分と形態との上から別けて、若干の群とし、其の一つ々の群を品詞といふ。

三 品詞の職分

- (一) 春風 が そよく 吹く。(口)
- (二) 散る 花 庭 の 面 に 白し。

右の文の春風・花・庭及び面は「なに」といふ物の名をあらはし、吹くと散るとは、どうする。「といふ動作をあらはし、白しは「どんなだ」といふ有様を、そよくは「どんなに」といふ有

様をあらはし、がの及びには上下の語の關係をあらはしてゐる。かく語はそのもつてゐる意味によつて、それぞれその職分がちがふ。品詞の別ちは、主として其の職分のちがひによる。

第一節 名詞

四

事物の名をあらはす品詞

- (一) 清少納言も紫式部も昔の才女である。(口)
- (二) 日本帝國は獨逸の領地たりし南洋諸島を統治せり。
- (三) 容は梅の如く操は松の如し。

(四) あの花は右が白で、左が赤だ。(口)
右の文の中の傍線を施してある語は、皆事物の名を「なに」といひあらはしてゐる。

事物の名をあらはす品詞を名詞といふ。

數をあらはす名詞

- (一) 一つに二つを加へて三つなり。
 - (二) 其の五つめが實は第四の品です。(口)
- 右の文の(一)の一つ・二つ及び三つは事物の數量を「いくら」といひあらはし、(二)の五つめと第四とは順序を「いくつめ」といひあらはしてゐる。
- 事物の數量をあらはす「いくら」も、順序をあらはす「いくつ

めも、廣く見れば、共に「な」といふものの中であるから、亦名詞の一種とし、特に**數詞**といふ。

練習 左の文の名詞をぬき、ことに**數詞**を別て。

- 一 春夏秋冬を四時といふ。
- 二 居候三杯目にはそつと出し。(口)
- 三 上野公園の山王臺には、彰義隊の墓や、西郷隆盛の銅像がある。(口)
- 四 一を聞き十を知る。
- 五 この日は、バリの全市が美しい花の祭の装になるのです。(口)
- 六 ビールやマッチは、盛に中華民国や南洋に輸出される。(口)

讀本の中から**地名人名**を拾へ。

第二節 代名詞

六 事物の名の代りに用ひる品詞

- (一) 我、汝の事を彼に告げん。
- (二) これはそれより大きい。(口)
- (三) その物をかそこへ運べ。
- (四) あちらへ行きこちらへ復る。(口)

右の文の中の傍線を施してある語は、皆事物の名の代りに用ひられる。

事物の名の代りに用ひる品詞を**代名詞**といふ。代名詞は「だれ」「どれ」「どこ」「どちら」などいひあらはす語で

七

あつて、皆「なに」といふ名詞の代用である。
實體の觀念をあらはす品詞

名詞・代名詞は引きくるめて見れば、皆「なに」といふ間に應ずる語であつて、廣く實體の觀念をあらはすものである。それ故合せて體言といふ。

八

文の題目となる品詞

- (一) 花が 咲く。(口)
- (二) 水 清し。

右の例は何れも或題目について敘述し、一つのまとまつた思想をあらはしてゐる。すべて一つのまとまつた思想をあらはす語の結合を文

といふ。

- (三) 花が 鳥を 招く。(口)
- (四) 雪 花に 似る。
- (五) 私が 鶏に 餌を 與へる。(口)
- (六) 心 水に 同じ。
- (七) 月日は 水より 速い。(口)

等も皆文である。さうしてその敘述にはいろいろの形があるが、いづれも「なに」かについて述べなくてはならぬ。いから、其の題目となる語は皆名詞若しくは代名詞、即ち體言である。

體言は文の題目となる品詞である。

練習 左の文から代名詞をぬき出せ。

- 一 お前はあちらへ行つて遊べ。(日)
- 二 私の村はあの山のこちらにあります。(日)
- 三 わらはもかねて君の御芳名をば承り居り候。
- 四 この本はわたくしの、その筆はあなたのです。(日)
- 五 だれがかけたか虹の橋。(日)
- 六 こちといへばそちが勝れるこゝちして、こゝと定むる方のなきかな。
- 左の文から體言をぬき出せ。
- 七 平和が重い荷を背負つて來た。(日)
- 八 病は口より入り、禍は口より出づ。
- 九 小積りて大となる、萬仞の山も一簣に始まるが如し。

第三節 動詞

九 事物の動作をあらはす品詞

- (一) 姉がピアノを弾くと、妹が歌ふのです。(日)
- (二) うれしき事を喜び、かなしき事を憂ふ。
- (三) 鳥が鳴き、花が落ち、水が流れる。(日)

右の文の中の傍線を施してある語は、皆事物の動作を「と」うする。」といひあらはしてゐる。

事物の動作又は存在をあらはす品詞を動詞といふ。

練習 左の文から動詞をぬき出せ。

- 一 月の光の照る庭に、きら／＼と露が散る。(日)

- 二 船まつと休らふ程に、川上の山の端見えて夜はあけにけり。
- 三 岩石が面白く並び、木立が小暗く繁る。(口)
- 四 學を修め、業を習ひ、以て智能を啓發し、徳器を成就す。
- 五 雨が降る前には、必ずこの山に雲がかゝる。(口)
- 六 山くづれて川を埋め、海かたぶきて陸をひたせり。
- 七 心こゝにあらざれば、視れども見えず、聽けども聞えず、食へどもその味を知らず。

讀本の既習の部から動詞を拾ひ、動作の種類を考へよ。

第四節 形容詞

二 事物の有様をあらはす品詞

- (一) 紙は白く、墨は黒し。

二 實體の用をあらはす品詞

(二) 山は高く、海は深い。(口)

(三) 長き竿を以て、高き枝の果物を落す。

(四) 正しい行をして、美しい一生を送れ。(口)

右の文の白く、黒し、高く及び深いは事物の有様を、どんなだ。といひ、あらはし、長き、高き、正しい及び美しいは事物の有様を、どんなといひ、あらはしてゐる。

事物の有様をあらはす品詞を形容詞といふ。

實體の用をあらはす品詞

動詞のあらはす動作及び形容詞のあらはす有様は實體より起り、若しくは實體に屬するものであつて、これを體の用といふ。それ故、名詞・代名詞を合せて體言といふの

三

に對して、動詞・形容詞を合せて用言といふ。
文の敘述となる品詞

ハケケルイヨウノトクノヨクヨク

- (一) 花が 咲く。(口)
- (二) 水 清し。

八頁、八を見よ。

右の二例の如きものを文といふこと、並びに其の題目となる品詞の體言であることは已に述べた所であるが、ここではその敘述となる品詞を考へて見よう。

(一)の文は「何がどうする」といふ形であつて、敘述をする語は動詞、(二)の文は「何がどんなだ」といふ形であつて、敘述をする語は形容詞である。
文はいかに複雑となつても、多くは此の二つの形を出な

い。

- (三) 花が 鳥を 招く。(口)
- (四) 雪 花に 似る。
- (五) 私が 鶏に 餌を 與へる。(口)
- (六) 心 水に 同じ。
- (七) 月日は 水より 速い。(口)

等は單複の度こそちがへ、皆かの二形の何れかに屬してゐる。それ故、文は其の敘述に於て、多くは動詞若しくは形容詞、即ち用言を要する。
用言は文の敘述となる品詞である。

練習 左の文から形容詞をぬき出し、其の「どんな」の義か「どんなだ」の義かを區別せよ。

一 美しいお姫様が寂しいお顔をして、大きい釣鐘の前の櫻をちつと見つめてゐました。(日)

二 良い薬は苦い。(日)

三 山けはしく、水清く、松青く、砂白し。

四 その赤い着物は古いが、この白い帯は新しい。(日)

左の文から用言をぬき出し、ことに敘述となつてゐる語を別て。

五 いふせい伏屋から、細い烟が立つ。(日)

六 笑つて迎ふる故郷の山いと懐かし。

七 年の少くて才の優れた女がある。(日)

第五節 副詞

三 用の有様をあらはす品詞

(一) 汽車速かに走る。

(二) 富士山がはつきり見える。(日)

(三) 室や、狭し。

(四) 夕暮の山路は大層寂しい。(日)

右の文の(一)の速かに(二)のはつきりとは走る・見えるといふ動作の有様を「どんなに」といひあらはし、(三)のや、と(四)の大層とは狭し・寂しいといふ有様の有様(すなはち程度)を「どんなに」といひあらはしてゐる。

事物の用(動作若しくは有様の有様をあらはす品詞を副詞といふ。

副詞は事物の用の有様をあらはす語であるから、用言(動詞若しくは形容詞にそはる。しかし、副詞のあらはす有様に、更に他の副詞を以て有様附けることがある。

(五) 汽車甚だ速かに走る。

(六) 富士山が極はつきり見える。(口)

右の文の(五)の甚だは副詞速かにの有様(程度)をあらはし、(六)の極は副詞はつきりの有様(程度)をあらはす副詞である。それ故副詞は他の副詞にもそはる。

四

文の修飾となる品詞

(一) 美しい花が 咲く。(口)

(二) 淺き水 清し。

右の文の美しいと淺きとは形容詞であつて、「どんな」といふ有様を附けて、花・水の體言を飾つてゐる。

(三) 花が さかりに 咲く。(口)

(四) 水 いと清し。

右の文のさかりにといとは副詞であつて、「どんなに」といふ有様を附けて、咲く・清しの用言を飾つてゐる。

形容詞と副詞とは文の修飾となる品詞である。そのうち形容詞は體言の修飾となり、副詞は用言の修飾となる品詞である。

練習 左の文から副詞をぬき出せ。

- 一 風徐ろに吹きて、波高く起らす。
- 二 彼は仕事を最もまじめに勉める。(日)
- 三 しばし待て、決して汝に迷惑をかけざるべし。
- 四 さやく揺れる草の葉に、ころ／＼虫が鳴いてゐる。(日)
- 五 態々御出で下され候ひしに、生憎不在いたし甚だ遺憾に存じ候。
- 左の文から修飾となる品詞をぬき出せ。
- 六 烈しき暑さなりしかば、草木いたく枯れたり。
- 七 せつせと働いても、やう／＼たべていかれる位だ。(日)
- 八 寶石を鑲めたやうなかはいゝ目紅をさしたかと思はれる優しい嘴、美しい羽毛に包まれた圓い胸、鳩は見るからに愛らしい。(日)

第六節 接續詞

二五 語句文章をつなぎ合せる品詞

- (一) 月・雪及び花を愛づ。
- (二) 五月の空晴れ又曇る。
- (三) 鉛筆或はペンを持參すべし。
- (四) 山を越え、かつ海をわたる。
- (五) 春は來れり。されども、花未だ開かず。

右の例の及び、又、或は、かつ及び、されどもは上下の語句又は文章をつなぎ合せてゐる。語句文章をつなぎ合せる品詞を接續詞といふ。

練習 左の文から接續詞をぬき出せ。

- 一 英・米・佛・伊並びに日の五大國を會す。
 - 二 花若しくは月あるべし。
 - 三 秋立ちたり故に風涼し。
 - 四 何人にも入場を許す、但し六歳以下のものは此の限りにあらず。
- 讀本の既習の部分について、接續詞を求めよ。

第七節 感動詞

二六 感動に發する品詞

- (一) あな、うれし。
- (二) ああ、草臥れた。(口)
- (三) あはれ、かの君は逝きしか。

(四) ええ、うるさい。(口)

右の例のあな、ああ、あはれ及びええは、感動した時、思はず發する聲である。

感動した時發する品詞を感動詞といふ。

練習 左の文に感動詞を入れよ。

- 一 ○○うれし、よろこばし。
- 二 ○○○今年の秋もいぬめり。
- 三 ○○○お珍らしいこと。(口)
- 四 ○○○出發せん。
- 五 ○○○さうですか。(口)

諸子の知つてゐる感動詞を示せ。

第九節 助詞

七 語と語との関係をあらはす品詞

- (一) 馬は人を乗せて遠く走る。
- (二) 東京からロンドンまで飛んだ。(口)
- (三) 再びかへり見しが、もはやあらざりき。
- (四) 行けば行かれる。(口)

右の例のはをてからまでが及びばは、語の下について、その語と他の語との関係をあらはす語である。
 語の下について、その語と他の語との関係をあらはす品詞を助詞といふ。

練習 左の文から助詞をぬき出せ。

- 一 月にむら雲、花に風。
- 二 木こり歌鳥のさへづり水のおとぬれたる小草雲かゝる松。
- 三 梅と櫻を両手にもつ。(口)
- 四 今より幾日にて達するか。
- 五 雨がひどく降るに、風までが烈しく吹く。(口)
- 六 よく勉強したが、からだは弱かつたから合格しなかつた。(口)
- 七 これ〇何〇讀む〇。
- 八 話〇聞い〇涙〇こぼれた。(口)
- 九 氣候〇寒けれ〇健康〇〇害なし〇いふ。

第九節 助動詞

六 動詞を助けて種々の意味を附ける品詞

(一) 智者は惑はず。
 (二) 朝早く起くべし。
 (三) ヴエルサイユに、講和會議を開いた。
 (四) 私も涼みに行かう。
 右の例の「ずべし」た及び「う」は動詞の下について、其の動作にいろいろの意味を附ける語である。
 動詞の下について、其の動作に種々の意味を附ける品詞を助動詞といふ。

五 獨立して意味をもたない品詞

助詞と助動詞とは、獨立してはその意味をもたず、他の語に附いて其の語の助けをするに過ぎない。この點が他の品詞とちがつてゐるから、特に名づけて助辭といふ。

練習 左の文から助動詞をぬき出せ。

- 一 あしたにはよろこび歌はん。
- 二 使を遣はして急を都に告げしむ。
- 三 〇もう人にたよるまい、自分一人で修行をしよう。
- 四 今年もすでに半ばは過ぎぬ。
- 五 子供に花をとりゆかせろ。
- 六 残暑もまだ退くまい。

- 七 村民皆其の家業を樂しめり。
- 八 六尺の塀も飛び越えられる。(日)
- 九 かゝる人を見ざるなり。
- 一〇 お菓子を食べたい。(日)

第十節 九品詞

三 九品詞

品詞は以上學んだ名詞・代名詞・動詞・形容詞・副詞・接續詞・感
 動詞・助詞及び助動詞の九つであつて、各其の職分がちが
 ふのである。
 その中、特に名詞・代名詞をば體言といひ、動詞・形容詞をば
 用言といひ、助詞・助動詞をば助辭といふ。さうして體言

は文の題目となり、用言は其の敘述となり、形容詞・副詞は
 修飾となる品詞である。

職分から見られた品詞

助辭		用言			體言	
助動詞	助詞	感動詞	接續詞	副詞	形容詞	動詞
				文の修飾	文の敘述	文の題目

練習

左の文を品詞に分別せよ。

- 一 衣服はよく風を通し日に當て汚れたるをば洗ふべし。
- 二 空中を支配する時代が来た。
- 三 心に望起らば困窮したる時をおもひ出すべし。
- 四 すいた事には身をやつす。
- 五 すつかり忘れて居たことがあつた。
- 六 あ日が出はじめた。
- 七 ふとん着てねたるすがたや東山。
- 八 坑内には鼠がたくさん居て困ります。

讀本の既習の文語文及び口語文の内について品詞を考へて見よ。

第二章 品詞の形態

三

形を變化する語と變化しない語

彼の 乗り たる 馬 は 甚だ 疾し。

右の文の動詞乗りは

乗らず。 乗りたり。 乗る。 乗れども。

の如くかはり、助動詞たるは

乗りたらん。 乗りたり。 乗りたる馬。 乗りたれども。

の如くかはり、形容詞疾しは

疾く走る。 疾し。 疾き馬。 疾けれども。

の如くかはる。 しかるに、

彼。の。馬。は。甚だ。

等はどんな場合にも、其の形をかへることがない。品詞は其の場合によつて、形の變化するものと、變化しないものとある。其の變化することを活用といふ。活用する語の變化しない部分を語幹といひ、變化する部分を語尾といふ。前の例の乗^の疾^疾及びた^たは語幹、ら^らり^りる^るれ^れ及びく^くし^しき^きけ^けれ^れは語尾である。

活用する品詞には動詞・形容詞及び助動詞の三つがあり、活用しない品詞には名詞・代名詞・副詞・接續詞・感動詞及び助詞の六つがある。

形態か見らた品詞

活用しない品詞	名詞 (數詞) 代名詞 副詞 接續詞 感動詞 助詞
活用する品詞	動詞 形容詞 助動詞

練習 左の文の品詞を、活用する語と活用しない語とに別ち、尙活用する語は其の語幹と語尾とを別て。

- 一 遠き親類より近き他人。
- 二 はるかのおなたに白い水煙が見える。(日)
- 三 父母は我を生み、我を養ひ、我を長せしめ、我を教へたり。
- 四 無言の行に口をきくといふ事があるか。(日)
- 五 弟は已に學校にゆきしが、妹は未だ家を出でず。

第十一節 活用する品詞

第一 動詞の活用

三 動詞の活用の種類

死なず。 書かず。 消えず。

死にたり。 書きたり。 消えたり。

死ぬ。 書く。 消ゆ。

死ぬ(る)人。 書く|文字。 消ゆ(る)雪。

死ぬ(れ)ども。 書け|ども。 消ゆ(れ)ども。

死ぬ。 書け。 消え(よ)。

右の例に見える如く、動詞の活用は必ず五十音圖の同行内に於てする。しかし、其の形式は一様でない。今分類してその種類を見ようと思ふ。

三 四段活用

書かず。 縫はず。

書きたり。

縫ひたり。

書く。

縫ふ。

書けども。

縫へども。

右の例の如く、五十音圖のアイウエの四列にわたつて變
るものを四段活用といふ。

二 三
ナ行變格活用

死なず。

死にたり。

死ぬ。

死ぬる人。

死ぬれども。

三
ラ行變格活用

死ぬ。

死ぬといふ語は、ナ行のアイウエ四列にわたつて變るこ
とは、四段活用と同じであるが、更に其のウ列音ぬにるれ
のそはつた形をもつてゐる、これをナ行變格活用といふ。

有らず。

有り。

有るなり。

有れども。

有りといふ語は、ラ行のアイウエ四列にわたつて變るこ
とは、四段活用と同じであるが、いひ切る形が有りてイ列

音であるのは、四段活用のウ列音であるのとちがふ。これをウ行變格活用といふ。

三 上二段活用

起きず。 落ちず。

起く。 落つ。

起く(る)なり。 落つ(る)なり。

起く(れ)ども。 落つ(れ)ども。

右の例の如く、五十音圖のイ・ウ二列にわたつて變り、更に其のウ列音にる、れのそはるものを上二段活用といふ。

モ 下二段活用

受けず。 消えず。

受く。 消ゆ。

受く(る)なり。 消ゆ(る)なり。

受く(れ)ども。 消ゆ(れ)ども。

右の例の如く、五十音圖のエ・ウ二列にわたつて變り、更に其のウ列音にる、れのそはるものを下二段活用といふ。

ニ 上一段活用

射ず。 煮ず。

射る。 煮る。

射れども。 煮れども。

右の例の如く、五十音圖のイ列音より外變らず、たゞそれに、る、れのそはるものを上一段活用といふ。

元 下一段活用

蹴けず。

蹴け(る)。

蹴け(れ)ども。

蹴るといふ語は、カ行のエ列音より外變らず、たゞそれに
る。れのそはつた形をもつてゐる。これを下一段活用と
いふ。

言 力行變格活用

來こず。

來こたり。

來こ。

三 サ行變格活用

來こ(る)なり。

來こ(れ)ども。

來といふ語は、カ行のオ・イ・ウ三列にわたつて變り、更に其
のウ列音にる。れのそはつた形をもつてゐる。これをカ
行變格活用といふ。

爲こず。

爲こたり。

爲こ。

爲こ(る)なり。

爲こ(れ)ども。

爲といふ語は、サ行のエ・イ・ウ三列にわたつて變り、更に其のウ列音に^ずれるのそはつた形をもつてゐる。これをサ行變格活用といふ。

すは他の語と合成して、動詞を作ることが多い。それには時として濁つてザ行活用となるものもある。

欲す、罪す、要す、進歩す、生ず、論ず、安んず。

三 三 動詞の九活用

動詞の活用にはすべて九種ある。四段・ナ行變格・ラ行變格・上二段・下二段・上一段・下一段・カ行變格及びサ行變格がこれである。

練習 左の文の動詞をぬき出し、其の活用をいへ。

別表第一圖を見よ。

一 敵の司令官は白旗を掲げて降り。

二 立つ鳥跡を濁さず。

三 今日くる友を迎へんと、急ぎて停車場に車を走せたる人あり。

四 楽しみは珍しきふみ人にかりて、はじめ一ひらひろげたるとき。

五 年少き中に習慣となることは、終身永續して變せず。

六 靜に觀すれば、宇宙の富は殆ど三坪の庭に溢るゝを覺ゆるなり。

七 隠れたるより見るゝはなし。

第二 動詞の活用形

三 用法による動詞の活用

動詞の活用する各の形は、其の用ひ處がちがふのである。それ故其の用法によつて、動詞の活用形を分類すること

言

が出来る。

未然形

人行かば。

蟲死なば。

暇あらば。

兒起きば。

賞を受けば。

裕を著ば。

球を蹴ば。

客來ば。

車の音せば。

右の例の如く、下に助詞ばを付けて、動作のまだ起らない前に、假定する意をあらはす活用形を未然形といふ。未然形は助動詞んを付けて、動作の未來に起ることをあらはし、助動詞ずを付けて動作の起らないことをもあらはす。

明日、われ行かん。

言

連用形

蟲未だ死なず。

行き過ぐ。

死に絶ゆ。

あり難し。

起き出づ。

受け取る。

著かふ。

蹴たふす。

來あはす。

しそこなふ。

右の例の如く、下の動詞形容詞即ち用言にいひつゞける活用形を連用形といふ。連用形は多くの動作のつゞいて起る時、前の動作をいひさす形となり、又この形でいひ据ゑる時は名詞となる。親は起き、兒はいねたり。往きは早く、歸りは遅し。

三 終止形

人行く。

蟲死ぬ。

女あり。

兒起く。

賞を受く。

裕を著る。

球を蹴る。

客來。

車の音す。

右の例の如く、下につゞけないで、言ひきるに用ひる活用形を終止形といふ。

終止形は又助詞ともを附けて動作を假定することをあらはす。

面に矢を受くとも、かへりみはせじ。

三 連體形

行く人。

死ぬる蟲。

家にある人。

三 已然形

人行けば。

蟲死ぬれば。

女あれば。

兒起くれば。

賞を受くれば。

裕を著れば。

球を蹴れば。

客來れば。

車の音すれば。

右の例の如く、下の體言にいひつゞけるに用ひる活用形を連體形といふ。
連體形はその下の體言を省いて、そのまま、體言代用をすることがある。

起くるを見て、寝ぬるをやむ。

起くる兒。

受くる賞。

著る裕。

蹴る球。

來る客。

音する車。

右の例の如く、下に助詞はを付けて、動作の起つたことを確定する意をあらはす活用形を已然形といふ。
 已然形は又ど若しくはどもを付けて、動作を確定するこ
 とをあらはす。

客あれどももてなす者なし。

元
命令形

汝行け。安らかに死ね。さきくあれ。

早く起きよ。賞を受けよ。裕を著よ。

球を蹴よ。また来よ。復習をせよ。

右の例の如く、動作することを命令するに用ひる活用形を命令形といふ。

(一)をつけてある語は、語幹語尾を別けられぬものである。

動詞活用表

サ行變格	カ行變格	下一段	上一段	下二段	上二段	ラ行變格	ナ行變格	四段	種類	活用形					
										語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
(爲)	(來)	(蹴)	(見)	消	落	有	死	縫	は	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
せ	こ	け	み	え	ち	ら	な	は	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	
し	き	け	み	え	ち	り	に	ひ							
す	く	ける	みる	ゆ	つ	り	ぬ	ふ							
する	くる	ける	みる	ゆる	つる	る	ぬる	ふ							
すれ	くれ	けれ	みれ	ゆれ	つれ	れ	ぬれ	へ							
せよ	こよ	けよ	みよ	えよ	ちよ	れ	ね	へ							

練習 左の文の中から動詞をぬき出して、其の活用を検し、更に六つの活用形を作れ。

- 一 繪葉書は獨逸より流行し初めしものと聞く。
- 二 良人に事へ、子をはぐくみ、炊ぎと濯ぎとに日を送りぬ。
- 三 茸なども生ひ出でん、栗もはや落つべし。

左の文の中から動詞をぬき出し、其の活用形をいへ。

- 四 小切手は通貨にて支拂をなす手数を省かんが爲發行するものなり。
- 五 醫藥効を見ず、頼む所は唯神のみと、妻はひたすら神に祈りぬ。
- 左の文にある動詞の活用形に誤用があるならば正せ。
- 六 山里に隠る人は全く世の名利をば捨つる。
- 七 汝若しかの地に旅行すれば、必ず友の墓をおとづるれ。
- 八 たとひ死ぬれども、退かじ。

第三 口語動詞の活用及び活用形

四 口語動詞の活用

書かう。	死なう。	有らう。
書きます。	死にます。	有ります。
書く。	死ぬ。	有る。
書けば。	死ねば。	有れば。

右の例の如く、文語の四段活用・ナ行變格活用・ラ行變格活用は、口語では共に四段活用である。

著ない。
著(る)。

起きない。
起き(る)。

著(れ)ば。

起(き)れ(ば)。

右の例の如く、文語の上二段活用・上一段活用は、口語では共に上一段活用である。

蹴(む)ない。

受(け)ない。

蹴(る)。

受(け)る。

蹴(れ)ば。

受(け)れ(ば)。

右の例の如く、文語の下二段活用・下一段活用は、口語では共に下一段活用である。

來(来)ない。

來(来)ます。

來(来)る。

來(来)れ(ば)。

文語の力行變格活用は、口語でも力行變格活用である。但し來といふ形がないから、文語と全く同一ではない。しない。(せず)

す(る)。

す(れ)ば。

文語のサ行變格活用は、口語でもサ行變格活用である。但しすといふ形がないから、文語と全く同一ではない。口語動詞の活用は四段・上一段・下一段・力行變格・サ行變格の五つである。

文語口語動詞活用對照

文語		口語	
四 段 活 用	ナ 行 變 格 活 用	ラ 行 變 格 活 用	四 段 活 用
上 一 段 活 用	上 二 段 活 用	上 一 段 活 用	上 一 段 活 用
下 一 段 活 用	下 二 段 活 用	下 一 段 活 用	下 一 段 活 用
カ 行 變 格 活 用	カ 行 變 格 活 用	カ 行 變 格 活 用	カ 行 變 格 活 用
サ 行 變 格 活 用	サ 行 變 格 活 用	サ 行 變 格 活 用	サ 行 變 格 活 用

四

口語動詞の活用形

口語動詞の活用が以上のやうであるから、其の活用形も、亦これに準じてゐる。

たゞ文語の已然形に當る形に、助詞ばを附ける時は、

あなたが書けば、わたしが讀みませう。(口)

五時にも起きれば、起きられないことはない。(口)

の書けば、起きればの如く、動作のまだ起らない前に、假定する意をあらはすから、特に**假定形**と名づける。

四段活用以外の命令形は、口語文でも、

落ちよ。見よ。消えよ。蹴よ。來よ。爲よ。

の如く、文語と同じ形に用ひることがある。

口語動詞活用表

サ行變格	カ行變格	下一段		上一段		四段			種類	活用の語
		(蹴)	消	(見)	落	有	死	縫		
しせ	こ	け	え	み	ち	ら	な	は	未然形	活用形
し	き	け	え	み	ち	り	に	ひ	連用形	
する	くる	ける	える	みる	ちる	る	ぬ	ふ	終止形	
する	くる	ける	える	みる	ちる	る	ぬ	ふ	連體形	
すれ	くれ	けれ	えれ	みれ	ちれ	れ	ね	へ	假定形	
しせよ	こい	けろ	えろ	みろ	ちろ	れ	ね	へ	命令形	

練習 左の文の動詞をぬき、其の活用及び活用形をい

へ。

- 一 鶏が鳴けば夜が明けよう。(口)
- 二 雪が降り、氷の張る冬が来る。(口)
- 三 しようとして決心すれば、きつとし遂げる。(口)
- 四 今日あなたを迎へるうれしさが、胸一ぱいに溢れます。(口)
- 五 起きろと起す人となれ、起される人になるな。(口)

第四 形容詞の活用及び活用形

三 形容詞の活用

清くすむ。 つらく思ふ。

水清し。 心つらし。

清き水。

つらき事。

清けれども。

つらけれども。

右の例の清しもつらしも、共にくしきけれと活用する。

形容詞の活用は皆一樣にくしきけれである。たゞし、

美しく咲く。

同じく行く。

美し。

同じ。

美しき花。

同じきこと。

美しけれども。

同じけれども。

等の如く、其のいひ切る形に、しをつけない類がある。

形容動詞

清からず。

美しからず。

別表第二圖を見よ。

三

清かりき。

美しかりき。

清かるべし。

美しかるべし。

清かれども。

美しかれども。

右の例の清かり・美しかりといふ語は、もと清く・美しくに各動詞ありのつゝいて約められ、ラ行變格活用となつたものである。

次に

愚かなり 詳かなり 當然なり

などいふ一類の語がある。これらはもと愚かに・詳かに・當然にといふ副詞に、各ありのそはつて約められ、亦ラ行變格活用となつたものである。又

漠たり 赫々たり 爛漫たり
 などいふ一類の語がある。これらはもと漠と赫々と爛漫といふ副詞に各ありのそはつて約められ、同じくラ行變格活用となつたものである。
 以上三類の語は、職分に於ては形容詞と同じく、形態に於ては動詞と同じであるから、特に形容動詞と名づけて、形容詞の一種とする。

形容詞の活用形

- 未然形 行かば。 善くば。 悪しくば。
 連用形 行き著く。 善くあり。 悪しくあり。
 終止形 人行く。 行善し。 行悪し。

連體形 行く人。 善き行。 悪しき行。
 已然形 行けば。 善ければ。 悪しければ。
 命令形 行け。
 右の例の如く、動詞の活用形に形容詞を比べて見ると、形容詞にも未然連用終止連體已然の五活用形があるが、ただ命令形を缺いてゐる。

形容詞活用表

語	活用形				
	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
善	く	く	し	き	ければ
悪	く	く	し	き	ければ

望

形容動詞の活用形

形容動詞はラ行變格活用であるから、活用形も亦動詞のラ行變格活用と全く同じである。

形容動詞の活用形

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
清か	ら	り	り	る	れ	れ
赫々た						
愚かな						

望

口語形容詞の活用及び活用形

清くすむ。 美しく咲く。
 清い。 美しい。

清い水。

美しい花。

清ければ。

美しければ。

右の例の清い・美しいは共にく・い・けれと活用する。即ち文語でいひ切る時、しを附けない美しいの類も、口語では美しいといを附けるから、清いの類と全く一様になつてゐる。活用形に於て

未然形 清くば。

……………

連用形 清くすむ。

清くすむ。

終止形 清し。

清い。

連體形 清き水。

清い水。

已然形 清ければ。

清ければ。(假定形)

の如く、形容詞の文語・口語を比べて見ると、口語形容詞は未然形を失つて、く・い・い・けれの四形となつてゐる。連用形は次の如くうとなることがある。

お早うございます。(口)
美しうございますこと。(口)

口語形容詞活用表

美し	清	語	活用形
		未然形	
	く	連用形	
	い	終止形	
	い	連體形	
	けれ	假定形	
		命令形	

練習 左の文から形容詞をぬき、其の活用形を檢せよ。

- 一 朱に交れば赤くなり、麻の中の蓬扶けずして直し。
 - 二 古いものは美しくはないが、品がよい。(口)
 - 三 どの子馬も皆かはいらしい顔をして、おとなしく繋がれてゐます。(口)
 - 四 君は酸からず、甘からず、辛きはいかに唐辛。
 - 五 暑いも寒いも彼岸まで。(口)
 - 六 柔かなる草に身を横たふれば、鬱々たる心は自ら和ごみゆく。
- 左の文語を口語になほせ。
- 七 貧しき家にわびしく暮すは悲し。
 - 八 一方に利多からんも、他方に害少からず。
 - 九 聲勇ましく謠ひゆく兒等いと賑はし。
 - 一〇 冬の暖き日はどうれしきはなし。

第五 動詞の自他

四

自動詞と他動詞

(一) 水 流る。

(二) 栗 落つ。

右の例の流る・落つといふ動作は、これを起す主である水若しくは栗のひとりしてゐるものであるが、

(三) 水 花を 流す。

(四) 弟 栗を 落す。

の流す・落すといふ動作は、これを起す主である水若しくは弟の上へのみ止まらないで、花・栗の如き他のものを處

分する。

動作の、それを起す主にのみ止まつて、他に關係しないものを自動といひ、それを起す主にのみ止まらないで、他を處分するものを他動といふ。自動をあらはす動詞を自動詞といひ、他動をあらはす動詞を他動詞といふ。

他動詞には必ず花を・栗をの如く「何を」といふ語を要する。

四

自他の對

流るの自動詞に對して流すの他動詞があり、落つの自動詞に對して落すの他動詞があるが、すべての動詞が皆さうなのではない。

鳥 死ぬ。

女 あり。

犬を 打つ。

衣を 着る。

の死ぬ^{あり}は自動詞であつて、之に對する他動詞はなく、打つ^{着る}は他動詞であつて之に對する自動詞はない。

風 吹く。

風 花を 吹く。

小兒 笑ふ。

小兒 大人を 笑ふ。

門 閉づ。

小使 門を 閉づ。

右の例の上のは自動詞、下のは他動詞であるが、全く同一の語の場合によつていづれにもなり得るものである。

民家 焼く。(カ行下二段) 兵火 民家を 焼く。(カ行四段)

軍隊 進む。(マ行四段) 我が軍 陣地を 進む。(マ行下二段)

子 育つ。(タ行四段) 母子を 育つ。(タ行下二段)

右の例の上のは自動詞、下のは他動詞であつて、一見同一の語のやうであるが、其の活用のちがふのに注意せよ。

戦 起る。 列國 戦を 起す。

湯 冷ゆ。 風 湯を 冷す。

火 出づ。 家 火を 出す。

食糧 盡く。 敵軍 食糧を 盡す。

風 揚る。 子供 風を 揚ぐ。

右の例も、上のは自動詞、下のは他動詞であるが、これらは語尾を見れば、直ぐ異活用の語であることがわかる。要するに、動詞には、自他相對するものと、相對しないものとあり、相對するものには、全く同一の語を兩用するもの

と、語幹の似てゐて活用のちがつたものがある。
練習 左の文の動詞の自他を別けて、尙それに相對する語があるならば述べよ。

- 一 水嵩増して舟覆らんとす。
- 二 視れども見えず、聽けども聞えず。
- 三 昨夜雨が降つたせゐるか、空がきれいにすんで、向ふの天神山が近く見える。(口)
- 四 みだりに金錢を費すを止めよ。
- 五 唄を忘れたカナリヤは、後の山に棄てませうか。(口)
- 左の文の動詞の自他に誤用があるならば正せ。
- 六 大宮人の姿を此の川の水は、幾たびとなくうつつた。(口)
- 七 舟を彼の岸に着きて、人を下る。
- 八 心が喜に満してゐる。(口)

四九

自動詞で敘述をする文。

第六 敘述の自他

(一) 花 咲く。

(二) 鳥が 飛ぶ。(口)

右の文の敘述、咲く、飛ぶは自動詞であつて、其の動作の及ぶ「何を」といふ目的を取らないで、意味の完全することは已に言つた通りである。

- (三) 雪 花に 似る。
- (四) ヒューズが 議長と なる。(口)

の敘述、似る、なるは自動詞であつて「何を」といふ目的を取

らないことは、咲く、飛ぶと同じであるが、其の動作の標準となるものをいはなくしては意味が完全しない。自動詞で敘述をする文は、目的を取らないが、語によつては標準を取るものがある。

吾 形容詞で敘述をする文

(五) 水が 清い。(口)

(六) 山 遙かなり。

右の文の敘述清いは形容詞、遙かなりは形容動詞であつて、他に目的をも標準をも取らなくて、意味が完全するとは、咲く、飛ぶなどの自動詞に同じである。しかし、

(七) 心 水に 同じ。

吾

(八) 月日は 水より 速かなり。(口)
の同じ、速かなりは水に、水よりの如き標準を取らなければ、意味の完全しないことは、似る、なるなどの自動詞に同じである。
形容詞で敘述をする文には目的を取らず、たゞ比較をする時に標準を要する。
他動詞で敘述をする文。

(九) 花が 鳥を 招く。(口)

(一〇) 風 花を 散す。

右の文の招く、散すは他動詞であつて、鳥を、花をのやうな目的をいはなくしては、意味が完全しない。

(二) 妹 衣物を 弟に 著す。
 (三) 私が 鶏に 餌を 與へる。(口)

の著す・與へるは他動詞であつて、衣物を・餌をのやうな目的を要することは勿論であるが、更に弟に・鶏にのやうな標準をいはなくしては、意味が完全しない。

他動詞で敘述をする文は、すべて目的を取り、語によつては更に標準を取るものがある。

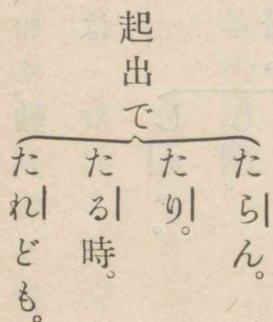
練習 左の文に要する標準若しくは目的を補へ。

- 一 天の星……稀なり。
- 二 我が家の猫……捕ふ。
- 三 先生が……授ける。(口)
- 四 字を書くには……ペンが速い。(口)

三

動詞やうの活用

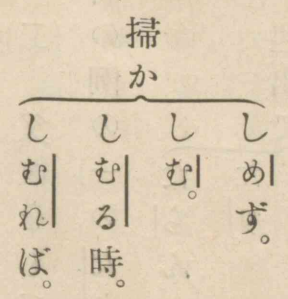
- (一) 彼は今日も早く起出でたり。
 - (二) 父、彼をして庭を掃かしむ。
- 右の例の(一)のたりは



五 たゞ……まかせて、二人は……あやつつた。(口)

第七 助動詞の活用及び活用形

の如く、動詞のラ行變格活用と全く同じに活用し(二)のしむは

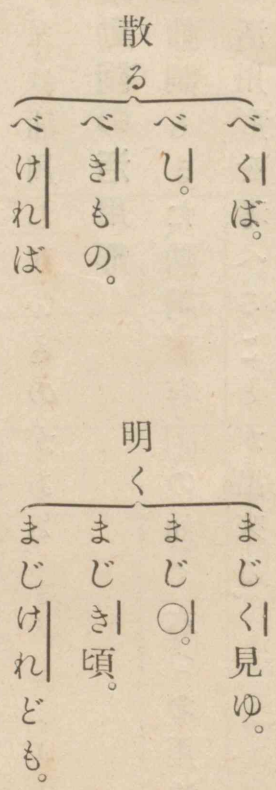


の如く、動詞の下二段活用と全く同じに活用する。かく助動詞には動詞と同じに活用するものがある。

三 形容詞やうの活用

- (一) 一週間の後には花も散るべし。
- (二) 夜はまだ明くまじ。

右の例のべしとまじとは



の如く、共に形容詞と同じに活用する。かく助動詞には形容詞と同じに活用するものがある。

四 特殊の活用

- (一) 花も散りき。
 - (二) 夜はまだ明けじ。
- 右の例の(一)のきは

散りし花。
き。
 しかば。

の如く、動詞・形容詞にない活用をし、(二)のじは少しも活用しない。

かく助動詞には動詞にも形容詞にもない活用をなすもの、又は活用しないものがある。

五 助動詞の活用形

助動詞もまた、動詞・形容詞の如く六つの用法にあてて、其の活用形を考へることが出来る。

じは形を變ぜず、終止・連體已然の用法がある。

りの未然形・已然形・命令形は現今用ひない。

用活殊特	種類		活用の			
	ラ	變ナ格行	未然形	連用形終止形		
じ	ず	ん	き	り	ぬ	語
—	ず	—	—	—	な	未然形
—	ず	—	—	—	に	連用形
○	ず	ん	き	—	ぬ	終止形
○	ぬ	ん	し	—	ぬる	連體形
○	ね	め	しか	—	ぬれ	已然形
—	—	—	—	—	ね	命令形

助動詞活用表

リの未然形・已然形・命令形は現今用ひない。

けりの未然形・命令形は用ひない。

べかりの連體形・已然形・命令形は用ひない。

〇はまじの終止形をあらはす。ごとしは已然形がない。

じは形を變ぜず、終止・連體已然の用法がある。

特殊活用				形容詞活用	助動詞活用							種類						
					下二段			ラ行變格										
じ	ず	ん	き	ま じ	ご とし	た し	べ し	つ	し む	さ す	ら る	べ かり	ざ り	な り	け り	た り	ぬ	語
	ず			く				て	め	せ	れ	ら				な	未然形 連用形	
	ず			く				て	め	せ	れ	り				に		
〇	ず	ん	き	〇し				つ	む	す	る	り				ぬ	終止形	
〇	ぬ	ん	し	き				つる	むる	する	るる		る				ぬる	連體形
〇	ね	め	しか	けれ				つれ	むれ	すれ	るれ		れ				ぬれ	已然形
								てよ	めよ	せよ	れよ		れ				ね	命令形

の活用形を考へることが出来る。

練習 左の文から助動詞をぬき出し、其の意味及び活用をいへ。

- 一 かしこに立てるはわが友なり。
- 二 知らざるを知らずとする、これ知れりといふべし。
- 三 「いざ花のあらん限り集め見すや」といへば姉と妹とは、はや遅れじと摘み始めたり。
- 四 黒きとばりにおほはれて、安き眠に入れるなり。

左の文の助動詞の活用形を検べよ。

- 五 再び炭素線の研究に没頭したれども、徒に多くの時日と金銭とを費したるに過ぎざりき。
- 六 我が身をすてて報いんと、起ちてぞ出でぬる草のいほりを。
- 七 はるかに行過ぎたる僧は聞えぬにやふりかへらず。

弄

口語助動詞の活用及び活用形

- (一) 生徒に本を讀ませる。(口)
- (二) 犬が打たれる。(口)

右の例のせる・れるは

せよう。

讀ませる。

せれば。

れない。

打たれる。

れれば。

の如く動詞やうに下一段活用である。

- (三) 風も吹かない。(口)
- (四) 人の道は知りたい。(口)

右の例のな^い・た^いは

なくなつた。

吹かない。

なければ。

たくない。

知りたい。

たければ。

の如く、形容詞やうに活用する。

- (五) 雨が降つた。(口)

(六) 私も参ります。(口)

右の例のたますは

たら、いかない。

降つたり、吹いたり。

た。

ませう。

参りました。

ます。

の如く、特殊の活用をする。

口語助動詞の活用にも、動詞やうのもの、形容詞やうのも

の、及び特殊なものがある。

口語助動詞活用表

○は即ち語尾がなく、只、いさいふ。

ですは命令形がない。

特殊活用					形容詞活用	動詞活用		種類	活用の
ま	よ	て	だ	た		さ	ら		
い	う	す	だ	た	い	れ	る	未形然	活用形
い	う	す	だ	た	い	れ	る	連用形	
い	う	す	だ	た	い	れ	る	終止形	
い	う	す	だ	た	い	れ	る	連體形	
い	う	す	だ	た	い	れ	る	假定形	
い	う	す	だ	た	い	れ	る	命令形	

の如く、特殊の活用をする。
 口語助動詞の活用にも、動詞やうのもの、形容詞やうのもの、及び特殊なものがある。

参り
 ました。
 ませう。

降つたり吹いたり。

練習 左の文から助動詞をぬき出し、そこに用ひてある活用形をいへ。

- 一 いつものやうにすんだ聲で號令をかけた。(日)
- 二 行かうと行くまいと、おまへの勝手だ。(日)
- 三 まあ一曲ひかせていただきませう。(日)
- 四 私も實は我が國の古代精神を知りたいといふ希望から、古事記を研究しようとした。(日)

左の文から助動詞をぬき出し、文語をば口語に、口語をば文語に改め見よ。

- 五 玉もみがかざれば光を放たず。
- 六 宿題をやつて見よう、うまく解かれるかわからない。(日)
- 七 行幸餘りに遅かりしかば、人をしてうかゞはしむるに播磨の今

宿といふ處より、山陰道にかゝり給ひし由なり。
八 私がいひつけられた著物を、妹に縫はせることにした。(巨)

第八 活用語語尾の假名遣

毛 動詞の語尾

すべて、動詞の語尾は五十音圖の同行内に活用するものであるから、その活用の何行であるかを知れば、語尾の假名遣を誤ることがない。

動詞の語尾の紛れるのは、ア行・ハ行・ヤ行及びワ行である。其の内ア行活用のものは

(得) え。 う。 うる。 うれ。(下二段活用)

(射) い。 いる。 いれ。(上一段活用)

ヤ行活用のものは

老 悔 報 い。 ゆ。 ゆる。 ゆれ。(上二段活用)

癒 覺 消 聞 越

肥 凍 沍 榮 聳 え。 ゆ。 ゆる。 ゆれ。(下二段活用)

絶 生 映 冷 殖

吼 見 燃 萌

ワ行活用のものは

植 飢 据 ゑ。 う。 うる。 うれ。(下二段活用)

(居) 率 ゐ。 ゐ。 ゐ。 ゐれ。(上一段活用)

等であるから、他は大抵ハ行活用であると思へばよい。

又濁音はザ行のジズと、ダ行のヂヅと紛れるが、ザ行活用の
 のは 掘^ジ ず^ズ ずる^{ズル} ずれ^{ズレ} (上二段活用)
 混^ミ ぜ^ゼ ず^ズ ずる^{ズル} ずれ^{ズレ} (下二段活用)
 の二語だけであるから、他は皆ダ行活用であると思へば
 よい。

變ず^シ 論ず^シ 生ず^シ 命ず^シ 安んず^シ

等の如く、サ行變格活用の連濁によつてザ行活用とかは
 つたものは、見分がつき易いのである。

形容詞助動詞の語末の濁音はすべてザ行である。
 同 じ。 凄まじ。 いみじ。 (形容詞)

別表第三圖を
 見よ。

舌

音 便
 語は發音の便によつて、其の原音の變じて他の音となる

行かず。 行かじ。 行くまじ。 (助動詞)
 動詞は五十音圖の同行内に活用するものであるから、其
 の活用形の或一つの假名遣を知る時は、他の形のは自ら
 推知される場合が多い。得^トのえ^エであることを知れば、う^ウ
 を誤ることなく、教^{キョウ}へ^ヘを知れば、教^{キョウ}ふ^フのふ^フをう^ウ。若^{ニホ}しくはゆ^ユ
 など誤ることなく、老^{ラウ}ゆ^ユを知れば、老^{ラウ}い^イのい^イをひ^ヒ。若^{ニホ}しくは
 ろ^ロなど誤ることなく、消^{シヨウ}ゆ^ユを知れば、消^{シヨウ}え^エのえ^エをへ^ヘ。若^{ニホ}しく
 はる^{ハル}など誤ることなく、植^{シヨク}ゑ^エを知れば、植^{シヨク}う^ウのう^ウをふ^フ。若^{ニホ}し
 くはゆ^ユなど誤ることはないのである。

ことがある。之を音便といふ。活用語の語尾には、音便が多い。

鳴きて。……………鳴いて。

嗅ぎたり。……………嗅いだ。

指して。……………指いて。

悲しきかな。……………悲しいかな。

赤き花。……………赤い花。

高し。……………高い。

ありたき事。……………ありたい事。

行くまじ。……………行くまい。

右の例のやうなのをイ音便といふ。イ音便の假名をひ。

ゐなど書いてはならない。

謠ひて。……………謠うて。

長くて。……………長うて。

あるべくもあらず。……………あるべうもあらず。

行かん。……………行かう。

右の例のやうなのをウ音便といふ。ウ音便の假名をふと書いてはならない。

死にて。……………死んで。

飛びて。……………飛んで。

摘みて。……………摘んで。

軽くす。……………軽んず。

右の例のやうなのを撥音便といふ。撥音便の假名は死
むで飛むでなど書かず、發音のまゝんと書くのがよい。

行きて。……………行つて。

待ちたり。……………待つた。

歌ひて。……………歌つて。

取りたり。……………取つたり。

右の例のやうなのを促音便といふ。促音便は發音のま
ま書き記せば、假名遣を誤ることはない。

練習 左の文の活用語語尾の假名遣を正せ。

- 一 よく霜雪に堪ゆるを松のみさをという。
- 二 皆樂しむで、業に就く様、感づるに餘りあり。

三 田をうへる少女の菅笠が揃ふている。(日)

四 盲蛇におちづとは、知らざることには大膽なるをいへるなり。

左の文の音便を指摘して、誤をば正し、更に原音に改めよ。

- 五 昨夕は御來車を辱ふし、久しぶりに拜顔を待候うて、こよなふうれしう存じ候。
- 六 女さかしうして牛を賣りそこなふたり。
- 七 木に縁つて魚を求むる、難ひかな。
- 八 呼むで應へられぬほど、問のぬけたものはなからふ。(日)

第十二節 活用しない品詞

五 名詞

き(木) ひと、くに、やま、こころ、すめらぎ。
右の例の如く、名詞はそのすべてに通じた形態上の類似をば求められない。只活用語より轉成したものには、ほぼ一定の形がある。

かすみ、こほり、おび、たゝかひ、よろこび。

等は動詞から轉成したものであつて、これらはいづれも動詞の連用形でいひ据ゑるのが常である。

あか、しろ、あを、くろ、(語幹)

とほく、ちかく、おほく。(連用形)

すし、からし。(終止形)

おもひ、かるさ、うれしげ。(語幹にみさげのついた形)

等は形容詞の轉成したものであつて、その中、語幹のみもの、語幹にみさげのついたものが最も多い。

著物、枯草、筆立、水入、書取。

高山、輕石、足輕、襠高、遠淺。

等の如く、熟語を作る場合には、動詞は連用形、形容詞は語幹のみであるのが常である。

國語の數詞は、固有語と外來語とを混用し、普通、事物を數へるには、

ひとつ、ふたつ、みつ、よつ、いつつ、むつ、ななつ、やつ、ここのつ、とを、十一、十二、十三、二十、五十七、百、千、萬。

こにはつを添へない。

こをの下に語をそへる時はをを省く。

の如く、十までは固有語を、十一以上は外來語を用ひる。固有語にはつをそへるのを常とし、之をそへない形は單獨に用ひられることなく、下に語をそへる時にのみ用ひられる。

ひとり、ふた棟、いつ箱、ここの度、と組。

無名數の計算には、一より始めてすべて外來語を用ひることがあり、また下に語のそはることは勿論である。

三に九を加へて、五を減じ、四を乗じて、七にて除す。

七本、十三回、八十六歳、二千三百五十五尺。

百二十番、一千五百七十九號。

代名詞

六

代名詞の、人の名の代りに用ふるものを人代名詞といひ、事物・場處・方向の名の代りに用ひるものを指示代名詞といふ。

人代名詞のうち、自己を呼ぶのを自稱といひ、相手を呼ぶのを對稱といひ、自己・相手以外を呼ぶのを他稱といひ、それと定まらないものを呼ぶのを不定稱といふ。指示代名詞のうち、自己に尤も近いものを呼ぶのを近稱といひ、やゝ離れたものを呼ぶのを中稱といひ、遠いものを呼ぶのを遠稱といひ、どれと定まらないものを呼ぶのを不定稱といふ。

今これを表にして示すと次のやうである。

代名詞の種類

指示代名詞				人代名詞	
方向	場處	事物			
こ ち	こ こ	こ れ	近 稱	わ れ	自 稱
そ ち	そ こ	そ れ	中 稱	な ん ち	對 稱
あ ち	あ こ	あ れ	遠 稱	か れ	他 稱
い ち	い こ	い れ	不 定 稱	た れ	不 定 稱

人代名詞は多く語末にれをもち、指示代名詞は、事物にれ、場處にこ、方向になた、もしくははかた及びちをもつ。

人代名詞の自稱と他稱とは、他の品詞、殊に名詞から轉成したものが多し。皆相手に對する敬讓の意をあらはす爲である。

わたくし、わらは、みづから、それがし。

自分、僕、小生、拙者。

きみ、との、おんみ、そのもと、おまへ。

貴殿、貴嬢、御前、足下、閣下、殿下。

口語の人代名詞には轉成語が多く、うちには指示代名詞から轉成したものとさへある。指示代名詞には文語の訛つたものがある。

今その普通なものを表にすると、次のやうである。

口語代名詞の種類

指 示 代 名 詞				人 代 名 詞	
方 向	場 處	事 物			
こ こ ち ら	こ こ	こ れ	近 稱	じ ぶ ん	自 稱 わ た く し
そ つ ち ら	そ こ	そ れ	中 稱	お ま へ	對 稱 あ な た
あ つ ち ら	あ そ こ	あ れ	遠 稱	あ の か た れ	他 稱 あ の か た
ど つ ち ら	ど こ	な ど に れ	不 定 稱	だ な た れ	不 定 稱 だ な た

二 副 詞

たゞ、もつばら、もつとも、なほ、まづ、いと、
はなはだ、しばし、あまた。

等の如く、副詞はそのすべてに通じた形態上の類似を求められないが、

すでに、さらに、靜かに、誠に、しきりに(このついで)

わざと、さつと、はらくと、判然と(このついで)

むつとして、嚴として、燦爛として(このついで)

よく、疾く、かなしく、面白く(形容詞の連用形)

あまり、たとひ、つまり、くりかへし(動詞の連用形)

かねて、きはめて、すべて、はじめ(動詞のついで)

絶えず、覺えず、はからず、思はず(動詞のついで)

ゆめく、行くく、はるく、しらすく(語疊)

等は、やゝ、其の類似が見出される。中に活用語から轉成

三

したものがあつたが、副詞となつては活用することがない。

接続詞

また、かつ、或は、はた、及び、並びに、さて、若しくは、故に、爲に、かくて、そもく、すなはち、もつとも、たゞし。

等の如く、接続詞は殆ど形の類似が求められない。かつ接続詞の多くは他の品詞から轉成したものである。

三

感動詞

あ、あゝ、あら、あな、あはれ、や、やよ、いで、いざ、えゝ、おゝ、おや、まあ、やあ、よう。

等の如く、感動詞はア行・ヤ行などの音をもつものが多い。

六

助詞

の、が、と、を、に、へ、より、から、まで、ば、とも、ども、ども、て、で、つゝ、は、も、ぞ、や、か、こそ、ながら、ばかり、のみ、さへ。

等の如く、助詞はすべてにわたつて形態の類似が求められない。只一・二・三音の簡単な形であることが一致してゐるばかりである。

練習 左の文から活用しない品詞をぬき出せ。

- 一 私は、忽ち其の木の下の、一つのひゞきを聞いた。(巨)
- 二 君のかがへをいへ、さらば世のまどひも自ら解くべし。
- 三 船の上から見ると、この邊の海岸は、どこまでも椰子の木で覆は

- れてゐるのです。(口)
- 四 おやまあ、びつしより、お濡れなかつた。(口)
- 五 紀の國の高野の奥の古寺に、杉のしづくを聞きあかしつゝ、
- 六 ゆきの早さに比して、かへりの晩さをきづかふ。

第三章 品詞の接續

五 語のつゞき方

- (一) 行かん、死なん、あらん、過ぎん、消えん、
見ん、蹴ん、來ん、せん。
- (二) 姉と妹とあり。汝と遊ばん。商人となる。
- (三) 行けど、死ぬれど、あれど、過ぐれど、見れど、

消ゆれど、蹴れど、來れど、すれど、寒けれど、

右の例に於て、助動詞んの動詞につゞくのは勿論、しかも其の未然形にのみつゞいて、他の活用形につゞかず、助詞とは體言につゞくが、どは用言につゞき、しかも其の已然形にのみつゞいて、他の活用形につゞかない。かく品詞の相互に接續するには一定の法がある。其の接續の中で、殊に注意すべきは助詞と助動詞とに就いてである。

六 助詞の接續

助詞には

- (一) 林の中に、鳥の鳴く聲す。

(二) 猫が鼠を捕へる。(口)
 ののがを等の如く、體言につゞくもの、
 (三) 日出てば、起きん。(未然形に)
 (四) 風が吹いて、花を散す。(口 (連用形に)
 のばて等の如く、活用する語につゞくもの、
 (五) 「われも人なり。などいふもをかし。
 (六) それは、なき數に入る名をぞ留むる。といふ歌ぞ。
 のもぞ等の如く、種々の品詞につゞくものがある。その
 中、活用する語につゞくものは、其の活用する語の一定の
 活用形につゞくことは、初に述べたやうである。

助詞接續法

體言につゞく助詞	活用語につゞく助詞	種々の品詞につゞく助詞
<p>の が と を に へ から より まで</p> <p>注意 句に、をは活用語につゞくものもあるが、意味がちがふから區別するがよい。</p>	<p>は(ならからので) と(うとようと) ど(けれども) も(ても) に(のに) を(ものを) が て て(ないで) つつ ながら</p>	<p>は も ぞ なん や か こそ ばかり(ほくらゐ) のみ(ばかり) だに(だけでも) すら(さへ) さへ(まで)</p>

注意 (一) の内は口語、他は文語若しくは文語口語共通のものである。

宅

助動詞の接續

助動詞には

(一) 書を讀まん。

(二) 外出を許さず。

(三) 人に笑はる。

のんずる等の如く、定まつて活用する語の未然形につゞくもの、

(四) 食物をば炊きたり。

(五) 昨日歸り來りき。

(六) 東京に行きたし。

のたりきたし等の如く、連用形につゞくもの、

(七) 貯へて不時の用に供ふべし。

(八) まだ夜は明くまじ。

のべしまじ等の如く、終止形につゞくもの、

(九) 夜はしんくと更くるなり。

(一〇) 日月は流るゝ如し。

のなり如しの如く、連體形につゞくもの、

(一一) 獨逸は遂に降り。

のりの如く已然形につゞくものがある。

口語助動詞のつゞき方も多く文語に準じて、皆定まりがある。

助動詞 接續法

<p>る・すは四段活用・ナ行變格活用・ラ行變格活用につゞき、らる・さすはそれ以外の活用にづく。</p>	
未然形に	る らる す する
連用形に	つぬ たり (時) けり たし
終止形に	べし べかり まじ らん らし
連體形に	なり ごとし
已然形に	り (四段活用に限り)

語	文
り (サ行變格活用に限り)	る らる す する む する
注意 指定のたりは體言につゞく。	たり (時) けり たし
注意 これらはラ行變格活用に限り、連體形につゞく。	べし べかり まじ らん らし
注意 たりは體言にもつゞき、如しは助詞を取つて活用する語にもつゞき、助詞を取つて體言にもつゞく。	なり ごとし
	り (四段活用に限り)

れる・せる・うは四段活用に つゞき、られる・させる・ようは四段活用の外の活用に つゞく。

語	口
まい (四段活用に限り)	れる られる せる させる う よう ん ない まい
	たい ます
	まい (四段活用に限り) らしい
注意 だ・である・すは體言にもつゞき、やうだは助詞のを取つて體言にもつゞく。	だ である です やうだ

練習 左の文の助詞を指摘し、其の用法・接續等に誤があるならば正せ。

- 一 つらしとも忍べ。
 - 二 お花は妹と弟をつれてゆけり。
 - 三 空には一片の雲さへない。(口)
 - 四 明日は降れども、出發せん。
- 左の文の助動詞の接續を検し、誤があるならば正せ。
- 五 富士山の雪は、夏も絶えまじ。
 - 六 ホノル、には、立派な日本町が出来てゐます。(口)
 - 七 首尾よく其の任務を終へり。
 - 八 これ、國民の忘るゝべからざる記念日なり。

下篇 文の構成

第四章 文

六 單語及び句

一頁、八を見よ。

花。 咲く。 水。 清し。 われ。 書。 を。 讀み。 たり。

右の一つくは單語であるが、

櫻の。 花が。 水は。 書を。 咲く花。 清き水。 讀みた

り。 咲かず。 美しく咲く櫻の花。 讀み了りたる書は。

等はいづれも二つ若しくは二つ以上の單語の集合して

成つたものである。 これを句といふ。

充

文

八頁、八を見よ。

(一) 花 咲く。
 (二) 水が 清い。(口)
 (三) 花 鳥を招く。
 (四) 雪が 花に 似てゐる。(口)

右の例は、二つ若しくは二つ以上の單語の集合であるが、句とはちがつて、何れも題目となる語とそれについて動作若しくは有様を敘述する語とから成立つてゐる。これは文である。

練習 左の句と文とを別て。

- 一 清く流るゝ水。
- 二 細い雨がしぼく降ります。(口)

10

主語・述語

第五章 文の成分

- 三 回る車に似たり。
 - 四 私は、あなたを、あの友だちに、引合せませう。(口)
 - 五 妹に飯を炊がしむ。
- 左の各、に語を補つて文を作れ。
- 六 父と五時半頃に家を出た。(口)
 - 七 この汽車はいづこへ。
 - 八 人の笑つたのが。(口)
 - 九 おつつけ降出ませう。(口)
 - 一〇 ことに春秋は旅行するに。

八頁、八、一四
頁、二二を見よ。

- (一) 櫻 咲く。
- (二) 水が 清い。(口)
- (三) 花 鳥を 招く。
- (四) 雪が 花に 似てゐる。(口)

右の文の櫻・水が・花・雪がは其の題目であつて、咲く・清い・招く・似てゐるは其の敘述である。文の題目をあらはす語を主語といひ、敘述する語を述語といふ。どんな文でも、主語と述語とがなくてはならない。多くの文は、皆何がどうする。若しくは何がどんなだ。といふ形に入るものであるから、主語は體言若しくは體言に準ずる語、述語は用言若しくは用言に準ずる語である。

鳥 飛ぶ。

かれは すばやい。(口)

萌ゆるは みな緑なり。

美しきは 飛び去れり。

水の流れるのは 休まない。(口)

などのやうであるし、

犬は 動物 なり。 蝶は 昆虫 だ。

落花 雪の 如し。 松風が 音樂の やうだ。

は

何は 何 だ。

何は 何の やうだ。

といふ形であつて、助動詞なりたりである。だです及び如し(やうだ)の述語となる場合である。

七 客語

七一頁、第六
叙述の自他を
見よ。

- (一) 風 櫻を 散す。
- (二) 生従が 文を 作る。(口)

右の例の述語、散す・作るは他動であつて、櫻を・文をの如き目的をいはなければ、意味が完全しない。

- (三) その面 猿に 似たり。
- (四) 天皇 貞愛親王を 大禮使總裁と し給ふ。

右の例の述語、似たりは自動、し給ふは他動であるが、共に猿に・大禮使總裁との如き標準をいはなければ、意味が完

全しない。

- (五) 三の四倍は 十二に 等しい。(口)
- (六) 櫻は 梅よりも 紅なり。
- (七) 彼は 學生 なり。
- (八) 大軍 雲霞の 如し。
- (九) 子守が 兒に 泣かれる。(口)
- (一〇) われ 妹に 衣を 縫はしむ。

右の例の如き述語には皆標準を要する。

文は述語の性質によつて、其の目的標準をあらはす語を要する。この目的標準をあらはす語を客語といふ。

客語は「何を、何とにより」とあらはれる場合が多い。それ故客

三

一八頁、一四
を見よ。

修飾語

語は主語と同じく體言若しくは體言に準ずる語である。

(一) 美しき櫻 咲く。

(二) 水 徐ろに流る。
甚だ清し。

右の例の、形容詞美しきは櫻を修飾し、副詞徐ろには流るを、副詞甚だは清しを修飾してゐる。

文の中にあつて、他の語を修飾する語を修飾語といふ。

修飾語は(一)の如く

どんな何。

と、體言につくものと、(二)の如く

どんなに どうする。
どんなだ。

と、用言につくものとある。體言につくのを形容的修飾語といひ、用言につくのを副詞的修飾語といふ。

暖き風 盛りなる花を 揺かす。

走る汽車が 旅行する客を はこぶ。(口)

冬の風が 木の枝を 鳴らす。(口)

かれが學は 我が國に 知られたり。

花を見る人が 山に這入る日を 惜しんでゐる。(口)

月明かなる夜は 星 稀なり。

右の如く、形容的修飾語は形容詞の連體形、若しくはこれに準ずる語である。

遙かに 富士山 見ゆ。

支那人はよく日本人に似てゐる。(口)
 午前五時に一同が起き出た。(口)
 式は京都に於て行はれたり。
 汽車からおりると雨が降り出した。(口)
 水清ければ魚住まず。

右の例の如く、副詞的修飾語は副詞若しくは副詞に準ずる語である。

三 獨立語

(一) あはれ、君は逝けり。
 (二) お花や、おまへは御飯をお炊き。(口)
 右の例のあはれ、お花やは、文の主要部には關係なくして

獨立してゐる語である。これを獨立語といふ。
 獨立語は感動詞及び呼掛の語である。

練習 左の文の主語・客語・述語を分別せよ。

- 一 流るゝ涙雨の如し。
- 二 和犬は洋犬より小さい。(口)
- 三 家庭生活の改善は婦人の力による。
- 四 米國のエヂソンは有名な發明家だ。(口)
- 五 おとうさん、こんなに言ひにくい言葉は外に無いでせう。(口)
- 左の文に、成るべく多くの修飾語を與へよ。
- 六 海が見える。(口)
- 七 氷水となる。
- 八 呉服屋が冬物を賣出した。(口)

第六章 成分の倒置及び省略

五 成分の常の位置

- (一) 花 咲く。
 (二) 猫が 鼠を 捕へる。(口)
 (三) 白雪 花と 見ゆ。
 (四) 母が 兒に 乳を 與へた。(口)
 右の例が、文の成分の常の位置であつて、主語は上、述語は下、客語はその間に在る。但し(四)の如く、客語の二つある時、其の目的と標準との上下は自由である。
 (五) 赤き花 咲けり。

(六) 猫が 鼠を 巧みに 捕へた。(口)
 右の例の如く、修飾語は、修飾される語の直上にあるのが常の位置である。但し、

猫 巧みに 鼠を 捕ふ。

自分は 今 食事を 終へた。(口)

の如く、副詞的修飾語は、修飾される語から、他の語を隔てて上にあることが多い。

(七) 太郎よ、 汝 學業を 怠るな。

(八) あれ、 汽車が 來た。(口)

右の例の如く、獨立語は文の頭に在るのが常の位置である。

五 成分の倒置

文の成分の常の位置は右のやうであるが、

- (一) 仰げば尊し、わが師の恩。
 - (二) 門を 私 が しめました。(口)
 - (三) 棹は 穿つ 波の上の月を。
 - (四) 私は きつとなります、えらい人に。(口)
 - (五) あなたは 本を 持つていらつしやい、あの机の上の。(口)
 - (六) あれ 蝶が 飛ぶ、ひらくと。
- 等の如く、文の成分は常の位置を變じて、上下顛倒されることがある。之を成分の倒置といふ。

六 成分の省略

- (一) (私) 明日參上仕るべく候。
 - (二) 千里の道も 足下より。(起る)
 - (三) どうぞ、あなた(それを) 召上れ。(口)
 - (四) 次に 學校長 (卒業生に) 卒業證書を 授く。
- 右の例の如く、文の成分は、其の意味の、言外に推知される限り、之を省くことがある。之を成分の省略といふ。

練習 左の文の倒置を正し、省略してある成分を補へ。

- 一 御覽なさい、あのかはいらしい兒を。(口)
- 二 まさか、そんなことが。(口)
- 三 よき日は明けぬ、さわやかに。朝日は出でぬ、花やかに、いざ、起

- 出でて、勇ましく我もはげまん、今日の業。
- 四 思はざりき、君の今日あらんとは。
- 五 まあお聞き下さい。(口)
- 六 待てども、来らず。
- 七 そんな事を、だれに、あなたはお聞きでした。(口)

第七章 文の組織上の種類

七 節

- (一) 秋 来れば、木の葉 もみぢす。
- (二) 舊き年 去り、新しき年 来る。

右の例の(一)の秋来ればも、木の葉もみぢすも、文の成分を

完全に備へてゐるが、共に大きな文の一部分である。(二)の舊き年去りと新しき年来るとも亦同じである。文の成分を完全に備へてゐても、或大きな文の一部分をなしてゐるものを節といふ。

六 單 文

- (一) 花 咲く。
- (二) 水が 清い。(口)
- (三) 鳥 花を 招く。
- (四) 雪 花に 似たり。
- (五) 私が 鶏に 餌を 與へる。(口)
- (六) 月日は 水より 速い。(口)

五 重文

(七) 犬は 動物 なり。
(八) 落花 雪の 如し。
右の例は、いづれも、中に節を含んでゐない。節を含まない文を單文といふ。

(一) 舊き年 去り、新しき年 來る。

右の文の節、舊き年去りと新しき年來るとは對等の關係であつて、いづれが主要、いづれが從屬といふことはない。かゝる節を竝立節といふ。竝立節は

- (二) 鳥 歌ひ、花 笑ふ。
- (三) 日 のどかに、風 暖かに、陽炎 燃ゆ。

六 複文

(四) 時 移り、事 往き、樂しみ 盡き、悲しみ 來る。
などの如く、二つは勿論、二つ以上對立するものがある。竝立節から成る文を重文といふ。

(一) 秋 來れば、木の葉 もみぢす。

右の文の節、木の葉もみぢすは文の主要な部分であつて、秋來ればはそれに從屬してゐる部分である。かく文の主要部分をなす節を主要節といひ、主要節に從屬する節を從屬節といふ。

(二) 花 散らば、人も來ざらん。

(三) 日 暮るれば、農夫かへる。
 (四) 春は 来れども、花咲かず。
 (五) 君は 行くとも、我は行かじ。
 右の例の傍線を施してある節は、皆從屬節である。
 從屬節を含んでゐる文を複文といふ。

文の組織と節

文の種類	節の種類
単文	節なし
重文	竝立節—竝立節
複文	從屬節—主要節

練習

左の文の節を検し、その組織上の種類を別て。

- 一 余は屢、彼の書を読むを聞きたり。
- 二 日の立つのは早い。(日)
- 三 世の中に父母が子を思ふ程深いものはありません。(日)
- 四 姉は琴を弾じ、我は花を生け、妹は茶を立つ。
- 五 此の本は印刷が鮮明だ。(日)

左の文を單文に別て。

- 六 天氣がよいので、麥打の音が聞える。(日)
- 七 月落ち、鳥啼き、霜天に滿つ。
- 八 我が再び歸り來ん日は、即ち功の成りたらん時なり。
- 左の單文を組合せて、重文又は複文を作れ。
- 九 男子は沖で泳ぐ。女兒は濱邊で貝を拾ふ。(日)

一〇 鳥啼く。梢の花散る。川の水流る。

第八章 文の敘述上の種類

二 敘述の形

(一) 風烈しく吹く。
 (二) 風烈しく吹けるか。
 (三) 風烈しく吹け。
 (四) 風烈しく吹けるかな。

右の例の(一)は單に事を敘述するに止まり、(二)は疑問の意をあらはし、(三)は命令の意をあらはし、(四)は感動の意をあらはしてゐる。これ等は文の組織上の區別ではなくて、

三 平敘體

敘述の形から來る區別である。

(一) 風烈しく吹く。
 (二) 紫式部は源氏物語を作れり。
 (三) 大正四年十一月十日、即位の大禮は行はれき。
 右の例の如く、單に事物を敘述するに止まるものを平敘體の文といふ。平敘體の終結は活用語の終止形を以てするものが常である。只

(四) 風ぞ烈しく吹く。
 (五) 紫式部なん源氏物語を作れる。
 (六) 大正四年十一月十日にこそ大禮は行はれしか。

三

の如く、文の中に助詞ぞ、なんを用ひた時は、その終結は連體形を以てし、助詞こそを用ひた時は已然形を以てする。

疑問體

- (一) 風烈しく吹けるか。
- (二) 汝かれを知れりや。
- (三) この事件に對する解決如何。
- (四) 誰か最も早き。
- (五) いつ歸り給へるか。

右の例の如く、疑問の意をあらはすものを疑問體の文といふ。疑問體の終結は、多く疑問の助詞を以てするか、上に疑問の語を置いて、下の活用語を連體形とするか或は

四

上下に疑問の語を以てするのを常とする。

命令體

- (一) 風烈しく吹け。
- (二) 汝、次の間に答へよ。
- (三) 汝等、死すとも退くことなかれ。
- (四) はやく御出で下されたし。

右の例の如く、命令・禁止・希望の意をあらはすものを命令體の文といふ。命令體の終結は、活用語の命令形、若しくは、命令・禁止・希望の助動詞を以てするのを常とする。

五

感動體

- (一) 風烈しく吹けるかな。

- (二) あはれ、彼は逝けり。
- (三) あゝ、勇ましき兵士なるよ。

右の例の如く、感動の意をあらはすものを感動體の文といふ。感動體の終結は感動の助詞を以てするか、上に感動詞を置いて、活用語の終止形を以てするか、或は上下に感動の語を置くのを常とする。

- (四) 來ること何ぞ遅きや。
- (五) その勢いかに烈しかりしぞ。

右の例は、疑問の語が入つてゐて疑問體の如く見えるが、其の實、遅きこと、勢烈しきことの高度なるを、感動的に敘述したものであるから、亦感動體の一種とする。

- (六) 風やは吹く。
- (七) 何の益かあらん。
- (八) 彼の心事、まことに悲しからずや。

右の例も、亦一見疑問體のやうであるが、疑ふ意は變じてその反對を確める意となる。即ち(六)は風は吹かず、(七)は何の益なし、(八)は彼の心事まことに悲しといふ義を感動的に敘述したものであるから、之も亦感動體の一種とする。

要するに、以上四體の文は形態上其の終結によつて別れるものである。それ故、

- (一) 三十五と二十七との差を問ふ。

(二) 敵の右方の偵察を命ず。
 (三) この兒の親に孝なるは、感すべきことなり。
 の如きは、實際の意は疑問。命令若しくは感動であるが、
 (四) 三十五と二十七との差幾何なるか。
 (五) 敵の右方を偵察せよ。
 (六) この兒、親に孝なるかな。
 とは、敘述の形を異にして、平敘體である。それ故、すべての文は、改めて平敘體の形をも取らせることが出来る。

練習 左の文の體を辨じ、終結を説明せよ。

- 一 何をか淑女といふ。
- 二 朝敵を亡ぼし、君を御代に即け參らせよ。

三 壺切の御劍は、御代々、天皇から皇太子にお傳へになる物だ。(日)
 四 そんな馬鹿なことがあるものですか。(日)
 五 誰か鳥の雌雄を辨せん。
 左の文を反意の表現に改めよ。

- 六 何人も父母あり。
- 七 どうしても、こらへられません。(日)
- 八 春山いづれも緑なり。

圖 例 語 る け 方				
用活格變行サ	用活格變行カ	用活段一下	用活段一上	用
<p>(爲)</p> <p>すすすしせ れる</p> <p>達</p> <p>すすすしせ れる</p> <p>生</p> <p>すすすじせ れる</p>	<p>(來)</p> <p>くくきこ れる</p>	<p>(蹴)</p> <p>け け け れ る</p>	<p>(鑄)</p> <p>い り っ れ る</p> <p>(着)</p> <p>き ぎ れ る</p> <p>(煮)</p> <p>に り っ れ る</p> <p>(干)</p> <p>ひ り っ れ る</p> <p>(見)</p> <p>み り っ れ る</p> <p>(居)</p> <p>ゐ り っ れ る</p>	<p>細</p> <p>ぶぶ れる</p> <p>出</p> <p>むむ れる</p> <p>消</p> <p>ゆゆ れる</p> <p>溜</p> <p>るる れる</p> <p>掛</p> <p>うう れる</p>

新修女子文法 終

圖 一 第

例 語 る け 於 に 用 活 の 詞 動

變行カ	用活段一下	用活段一上	用活段二下	用活段二上	用活格變行ラ	用活格變行ナ	用活段四	
來	蹴	躰	總	得	盡	有	死	咲
くきこ	け け け れ る	い り っ れ る	ぶぶぶべ れる	うううえ れる	くくくき れる	れ る り ら	ねぬぬぬに れる	けくきか
		着	改	更	過			泳
		き っ れ る	むむむめ れる	くくくけ れる	ぐぐぐぎ れる			げぐぎが
		煮	消	投	朽			推
		に っ れ る	ゆゆゆえ れる	ぐぐぐげ れる	つつつち れる			せすしさ
		干	濡	失	閉			勝
		ひ っ れ る	るるるれ れる	すすすせ れる	づづづぢ れる			てつちた
		見	据	混	用			拂
		み っ れ る	うううゑ れる	すすすせ れる	ふふふひ れる			へふひは
		居	捨	擧	帶			學
		お っ れ る	つつつて れる	づづづで れる	ぶぶぶび れる			べぶびば
			撫	重	恨			勵
			むむむみ れる	ぬぬぬね れる	むむむみ れる			めむみま
			堪	悔	懲			悟
			ふふふへ れる	ゆゆゆい れる	るるるり れる			れるりら

圖 一 第

例 語 る け 於 に 用 活 の 詞 動

用活格變行サ	用活格變行カ	用活段一下	用活段一上	用活段二下	用活段二上	用活格變行ラ	用活格變行ナ	用活段四	
<p>(爲)</p> <p>すすしせ れる</p> <p>(達)</p> <p>すすしせ れる</p> <p>(生)</p> <p>すすしせ れる</p>	<p>(來)</p> <p>くくきこ れる</p>	<p>(蹴)</p> <p>けけけ れる</p>	<p>(鑄)</p> <p>いいるい れる</p> <p>(着)</p> <p>きるき れる</p> <p>(煮)</p> <p>ににに れる</p> <p>(干)</p> <p>ひひひ れる</p> <p>(見)</p> <p>みるみ れる</p> <p>(居)</p> <p>ゐる れる</p>	<p>總</p> <p>ぶぶべ れる</p> <p>改</p> <p>むむめ れる</p> <p>消</p> <p>ゆゆえ れる</p> <p>濡</p> <p>るるれ れる</p> <p>据</p> <p>ううえ れる</p> <p>捨</p> <p>つつて れる</p> <p>撫</p> <p>ぶぶで れる</p> <p>重</p> <p>ぬぬね れる</p> <p>堪</p> <p>ふふへ れる</p>	<p>(得)</p> <p>ううえ れる</p> <p>更</p> <p>くくけ れる</p> <p>投</p> <p>ぐぐげ れる</p> <p>失</p> <p>すすせ れる</p> <p>混</p> <p>すすせ れる</p> <p>拾</p> <p>つつて れる</p> <p>恨</p> <p>むむみ れる</p> <p>悔</p> <p>ゆゆい れる</p> <p>懲</p> <p>るるり れる</p>	<p>盡</p> <p>くくき れる</p> <p>過</p> <p>ぐぐぎ れる</p> <p>朽</p> <p>つつち れる</p> <p>閉</p> <p>づづぢ れる</p> <p>用</p> <p>ふふひ れる</p> <p>帶</p> <p>ぶぶび れる</p> <p>恨</p> <p>むむみ れる</p> <p>悔</p> <p>ゆゆい れる</p> <p>懲</p> <p>るるり れる</p>	<p>有</p> <p>れるりら</p>	<p>死</p> <p>ねぬぬに れる</p>	<p>咲</p> <p>けくきか れる</p> <p>泳</p> <p>げぐぎが れる</p> <p>推</p> <p>せすしさ れる</p> <p>勝</p> <p>てつちた れる</p> <p>拂</p> <p>へふひは れる</p> <p>學</p> <p>べぶびば れる</p> <p>勵</p> <p>めむみま れる</p> <p>悟</p> <p>れるりら</p>

新修女子文法別表 第一圖

第二圖

發音圖

第一二

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

圖 二 第

例 語 の 詞 容 形

類 二 第	類 一 第
<p>し嬉 し喧 し凄 し忙 し正 し欲 し貧 し珍 し惜</p> <hr/> <p>け き ○ く れ</p>	<p>青・難・臭・快・酸・尊・拙・慘・幼</p> <hr/> <p>け き し く れ</p>

新修女子文法別表 第二圖

圖 三 第

例の遺名假尾語の詞動

行		行				行
下二段	上二段	下二段	上二段	四段	活用	
出づ	怖づ	存ふ	生ふ	纏ふ	語 例	
奏づ	閉づ	擬ふ	戀ふ	縫ふ		
撫づ	捻づ	控ふ	強ふ	使ふ		
擢づ	恥づ	交ふ	用ふ	救ふ		
秀づ	紅葉づ	迎ふ	.	鍛ふ		
詣づ	攀づ	辨ふ		補ふ		
愛づ		終ふ		祝ふ		
		教ふ		會ふ		
				購ふ		
				能ふ		
				味ふ		
				扱ふ		
				洗ふ		
				争ふ		
				言ふ		
				憩ふ		
				厭ふ		

新修女子文法別表 第三圖

文部省檢定

高等女子學校國語科用 大正十五年十月十六日

大正十四年十一月二十五日印刷
大正十四年十一月三十日發行
大正十五年九月十五日訂正再版印刷
大正十五年九月二十日訂正再版發行



發行所

東京市神田區表神保町二番地
振替口座(東京二六四四番)
大阪市東區博勞町五丁目五十六番地
振替口座(大阪四七一一番)

東京 文館
大阪 修文館

著者 春日政治
發行者 鈴木雄
發行者 鈴木常

新修女子文法
定價 金五拾八錢

本科三年柳組
佐々木 正 五



広島大学図書

2000043509

